2021年8月15日発行

こ だ ま

11号
日本基督教団　若松教会
〒808-0053
北九州市若松区修多羅1-8-1
TEL：093-771-4329

平和への願い

茶屋明郎牧師

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。」

（エフェソの信徒への手紙2章13節～22節）

沖縄戦：那覇市歴史博物館より

平和を願わない人は少ないし、大概の人が平和を願っています。ただ平和のために何かしたいと思う人は多くはない。

その理由に、今戦争していないし、平和であるからとか、また戦争を体験していないから、そして信仰者はあまり社会問題に取り組むべきではない、ことなどがある。

戦争体験者や被爆者、そしてヘイトスピーチなどの差別や偏見を受けて、人権や自由を阻害され、深い嘆き悲しみにある人達は、戦争の悲惨や平和の尊さ、そして差別のない平和のために熱心に取り組み、一生懸命になって運動しています。

沖縄戦で想像を絶するひどい悲しみや苦しみ経験をしている元ひめゆり学徒の人たちや被爆者の人たちが今抱えている課題の一つが、戦争の悲惨や原爆の恐ろしさを語り継ぐ後継者の育成の問題です。

この課題を取り組むことの中で浮かび上がっていることは、戦争を体験していない人が語り継ぐ後継者になりうるのかという課題であり、若者との関りの中で、見えてきたのは、戦争体験者とそうでない人の間にある壁を乗り越えられることの一つは、戦争体験の話は身体では体験できないが、心では体験できるし、話を心に刻むことであり、いのちの問題として理解するということでした。

そのことによって、壁を乗り越えて、自分のこととして受け止められるようになって、若者の中に平和ボランティアとして働く人が出ています。

平和聖日の今日、私たちは、イエスから「平和を作り出す者になる」という呼びかけを受けています。この呼びかけに答えていくために、私たちはどうすればよいのかという課題が与えられています。

この課題を担っていくために示されている言葉の一つが、「キリストは私たちの平和であります」というパウロの言葉です。この言葉には、キリストによって、平和への心や願いが生まれ、平和を実現していくために働くことが出来る新しい人が造り上げられるという意味があります。新しい人は、敵意という隔ての壁を取り除くことが出来る人のことです。

敵意が生まれる原因には、妬み、復讐、野心など様々なことがありますが、その中の一つに違いがあります。人種、民族、宗教、価値観などが、同じではなく、違っているということが、不信や無理解、心配や恐れ、憎しみや抑圧、排除や軽蔑などを生む温床となり、そこから対立や争い、暴力や戦争が起きると言う理解ができます。

このようにならないためには、この世に様々な違いがあるのは、優劣を競ったり、貴賤を判断するためにあるのではなくて、そうではなくて、違いを乗り越えて、一つになっていくためにあたえられている課題のためであるという理解が必要になります。

違いを認め合い、尊重し合い、助け合い、協力し合い、みな違っていい、みな違って尊いと理解し、違ってる相手は、自分にとって必要な存在、なくてならない存在であると理解できる寛容な心、愛する心、赦す心を持ち、育てていく課題を担うためであるということです。

この課題に気付き、担っていくという願いや心を持つことは、非常に難しくあります。というよりも、できない、できない場合が多いと言うのが、歴史が示している事実です。

神の民として選ばれているという違いをイスラエル民族は、その違いを特権として理解し、教会もキリストによって救われているという教えを絶対化して、自分たちと違う人達に敵意を抱き、さまざまに争いや戦争に加担してきています。

平和を実現するために生きる新しい人は、どのようにして、絶対化するという思いをなくし、敵意を打ち砕くことが出来るのかというと、それは、キリストの十字架であるとパウロは教えています。

キリストの十字架は、すべての人間の罪を徹底的に裁き、徹底的に赦し、徹底的に愛して、神の子として受け入れるという神の心が表されている出来事であり、この出来事によって、みな一つになっている、様々に違っている者が神の愛に生かされている一人一人である、みな神の子として神の家族の一員となっている。このように理解し、ここに固く立つことによって、優劣の意識や特権意識がなくなり、憎しみが消え、愛の心が生まれ、共に生きる志が生まれる。このことを信じられる人が、新しく創造される人に生まれ変わり、平和を実現するために働くようになるというのです。

この世は、敵意や排除、争いや戦争が絶えない。今でもいたるところで、憎しみあい、傷つき合い、殺し合っている現実が続いている。この厳しい現実に希望を失い、平和への取り組みにかかわる人も少なくない。しかし、キリストによって新しく創造されている人は、神がイエスを通して、神の国を実現してくださっている、この世は平和な神によって支配されているということに望みを置いて、時が来れば、神は栄光を現し、平和の実現にかかわっている人たちを祝福してくださることを確信して、違いを乗り越え、憎しみを乗り越えて、共に生きる社会の実現のためにできることをしていく歩みを続けていくに、違いありません。

コロナの時代が終わったら

松本京子

スリランカから来た人に、「日本人はいつお寺に行くのですか？」と、聞かれたことがあります。「寺の門は閉まっていて、日本では寂しい時、悲しい時に祈るところがありません。国では好きな時に寺に行けたのに」と、言うので、「外国籍の人がお祈りに行きたいそうです」と、いくつかの寺に伝えに行きました。「いつ来ると言われれば、開けてもいい」、「不特定の人が来るのは困る」、「檀家さんたちに迷惑をかけたくない」などが、応えでした。窮余の一策で、仏舎利塔が高塔山にあると、お知らせしました。ここは、ご存知のように、気軽に自転車で行けるところではなく、彼の“好きな時に祈れるところ”は、残念ながら、若松にはありませんでした。

スリランカではシンハラ人はシンハラ語を、タミル人はタミル語を話します。学校も言語によって別々です。仏教やヒンドゥー教というそれぞれの宗教も、言語と同様、日常生活を構成しています。

シンハラ人仏教徒が圧倒的に多いスリランカですが、仏教の寺の他に、ヒンドゥー寺院やモスクも、そこかしこにあり、人は礼拝し、祈っています。訪ねた際、誰もいなかったということは、まず、ありませんでした。路上に大きな仏像があるのも特徴です（昔、日本の道端にも、地蔵や同祖神、小さな祠などがあり、願掛けや困った時に避難する場所でした）。

スリランカの仏陀像：トラベルjpより

カトリック教会の多い漁村では、通りに聖人の祠が立っており、信者は、自分の名前の聖人の前で、礼拝することになっています。運転をしていても止まりますから、タクシーの運転手は、たとえ客が乗っていようとも、祠の前に躊躇しないで車を止めて、礼拝して車に戻ってきます。

スリランカの友人宅は、広々としてホッとできるところです。モノがほとんどないので、空間にゆとりがあります。それは、前に書いたように、まだ、人々の年収が低いからでもあります（高度経済成長期前の日本人の年収と、家に電気製品等がなかった時代と同様）。でも、休日は日本より多い上に、労働日は週5日で、週日は残業などしないで、さっさと帰宅して、家族と過ごします。子どもたちの目は澄んで明るいし、友人たちの丸い笑顔は、会うといつも心が慰められます。宗教や信心の話になっても、誰も薄笑いはしません。

昔は、私たちの先祖も、生活の一部として、信心を持っていたと思います。スリランカの仏教僧であるダルマパーラは、明治時代、近代化を推進しつつ、日本人が仏教信仰を持っていることを評価して、2度来日しています。しかしながら、産業革命が進み、大量生産・大量消費の時代に、広告による情報につられて、中流日本人は、一斉に消費に走りました。必要か必要でないかに関わらず、情報操作に操られて、モノを買う生活が続きました。家庭は、徐々に生産の場でなくなっていきました。

父方の祖母は、反物を買って家族の着物を縫いましたが、お姑さんから、「お前は、布を買う」と、叱責されたそうです。私の曽祖母の時代は、衣類を作るには、まず、布を織った、あるいは棉を育てて、糸繰りから始めたのでしょう。夏が過ぎると、綿を打直しに出し、布団を新しくしていた母の姿を思い出します。高度成長の時代、私たちは、なんでもソトで調達できるようになりました。買いまくりました。電気製品をはじめとして、モノは家の中に増殖しています。断捨離を誰もかれも気にやむほど、私たちはモノに場所を塞がれ、心を煩わされています。

収入が増え、モノを買い、モノが増えると、もっとモノが欲しくなり、カネを得る生活に追われる日々。父は、私たちが起きる前に出勤し、就寝後、帰宅していました。姪や甥の父親たちは、単身赴任でした。私たち日本人の労働環境は、いつのまにか世界最悪です：過労死・サービス残業・派遣労働・非正規雇用・移住労働者の使い捨て・有給休暇の未消化・女性の低所得・朝夕の通勤ラッシュ……。自然環境も破壊し続けてきたので、地球温暖化による被害も甚大です。モノと引き換えに、労働環境、自然環境、家族生活、心など、大切なことを二の次にしてきた私たちの日常……。

70年前の私の子どもの時代、家にあったのは、水道と電灯とラジオだけでした。ガスも電話もなく、トイレも水洗ではありませんでした。テレビも洗濯機も冷蔵庫も自動車も、エアコンもなかった……。それでも暮らしはありました。

緊急事態宣言が発令中のまさかのオリンピックの開催！コロナの時代が、予想より、もっと長引きそうです。コロナが終息する時が、1日でも早いことを願っています。早く、元の生活に戻りたいです。元の生活は、直前の2019年のそれではなく、空間や心にもゆとりのあった時にです。「人は、二人の神に仕えることはできない」という言葉を頼りに、コロナの時代が終わったら、神を敬い、人と共にいる生活に戻りたいと思います。

マイナスからプラスへ

河野泰重

「それば かりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、 忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。 希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

（ローマの信徒への手紙5章3～5）

僕は、一カ月前の2021年7月4日に、洗礼を受けて、新たなるスタートを切りました。

証しには、私がイエス様と出会った道のりを書きました。しかし、これはほんの一部です。苦悩だったり、困難だったりなどは、書きませんでした。今回は、洗礼前や洗礼後に味わった苦難だったり、試練だったりを、中心に書こうと思います。

受洗二週間前のことです。宗教委員の人たちと帰っていた際、ふと、「あ、この人はいいなぁ。僕と違って」と、急に、人と自分を比べて、「自分はできないな」ということを、思ってしまいました。今でも、あの時に、何故そう思ったのかは、わかりませんでした。

それが、苦難の始まりでした。そして、どんどん落ちて行きました。しかし、それでも神様は、救いの手を差し伸べてくれました。土曜日に行っている教会のメッセージで、「神様は、試練を与えてくださる」ということを話してくださり、「あ、俺は試されてるんだ」と思いました。

そこで、回復にどんどん向かうだろうと思っていました。しかし、そうではありませんでした。また、落ちて行きました。この週が一番ひどかったです。

この週も色々苦難が訪れて、ついに、「洗礼を受けるのをやめよう」と思いました。本当に地の底まで落ちてしまいました。とてもしんどかったです。しかし、イエス様は、私を見捨てませんでした。洗礼を受けたくないと思った次の日、大学の先生やクリスチャンの先輩に、「洗礼を辞めたい、委員会を辞めたい」と言ったら、全力で引き留めてくれました。僕は、その行動に涙をしました。また、KGKの主事の方にも相談したら、すごくいい答えが返ってきて、洗礼を受けようと改めて思うようになり、洗礼を受けました。

洗礼を受けて二週間が経とうとしたときに、また、試練が訪れます。今度は、「クリスチャンを辞めたい」となりました。というのも、委員会で色々あり、こんな状態になりました。しかし、その時も、イエス様は見捨てませんでした。大学の先生から、御言葉を貰いました。それが、ローマの信徒への手紙5章3～5でした。その時に、「イエス様は、苦難も喜んでくれるんだ」と思い、一気に軽くなりました。また、大学の先生から、「主から目を離すと、そこにあるのは苦しい事ばっかりだよ」と言われて、私は気づかされました。そして、再びイエス様と歩むことが出来ました。

イエス様は、どんなに苦しい時でも、どんなに不自由な時も、いつもそばにいてくれて、いつも助けてくださいます。どんなにマイナスなことがあっても、プラスに変えてくださいます。また、イエス様は、困難も喜んでくださいます。これは、困難であっても、決して見捨てずに、共にいてくださるということです。困難があっても、どんなに苦難であろうとも、イエス様は、絶対にそばにいてくださいます。また、信仰が落ちかけていたら、必ず引き戻してくださります。これからの生活、神様に委ねながら、信仰生活を送りたいと思います。

獄中のパウロ：レンブラント（1627）

受洗の思い出

二階堂裕

仙台五橋教会：ホームページより

2021年7月4日、若い方（7月3日、20歳になったばかり）の洗礼式に出席することが出来、感謝でした。

受洗者は、「河野泰重」君、梅光学院大学の2年生です。

家が近くという事もあり、キリスト教系の大学に入った事も、きっかけの一つになった事と、聞いています。

久しぶりに若い方の洗礼を見て、自分が受洗した頃を思い出しました。

55年程前に、高校3年生だった私は、家の近くにあった仙台五橋教会で、森田茂牧師によって、洗礼を授けられました。

仙台五橋教会は、当時、何処でも同じだと思いますが、若い世代が活発に活動しており、大学生が「共励会」、高校生が「共信会」に入って、学びと交遊に励んでおりました。

夏に、ワークキャンプ（開拓集落に泊まり込みで入って、農作業のお手伝いと交流会を行っていました）があり、その後、森田牧師より受洗を薦められ、あまり深く考える事もなく、受洗を決意しました。

兄と従妹も、4年ほど前に洗礼を受けていたので、影響を受けていたものと思っています。

共信会のメンバー4名（だったと思います）が、一緒に受洗を決心しましたので、森田牧師より、4回の受洗前勉強会をして頂き、クリスマス礼拝にて、洗礼式を行って頂きました。

何を勉強したのか良く覚えていませんが、森田先生より、「洗礼はスタートだよ、今から一歩一歩、イエス様向かって歩んで行きなさい」と、言われたことは覚えています。

何年間か、教会から離れていた時期もありますが、自分の意志で教会に行くのではなく、神様から呼び集められている事をつくづく感じています。

河野君、本当におめでとうございます。これからも、よろしくお願いします。

若松教会のオルガン

山﨑知恵美

山﨑知恵美さん：校歌を楽しむ会より

子供の頃から、地元に教会があることを知っていました。

昨年のクリスマス・イブに、チラシを見て、初めて実父と教会を訪れ、讃美歌を一緒に歌いました。

それから、オルガンで讃美歌を弾いて、喜んでもらえたらと思って、厚かましくとも、時々礼拝に参加しています。

普段弾いているピアノとは勝手が違うけれど、オルガンには、特別な良さがあると思います。

若松教会のオルガンは、昔懐かしい足踏み式で、さらに、鍵盤の上についているボタンを引っ張ると、音色を変えられます。

これからも、時間が取れれば、弾かせていただきたいと思っています。

2021年度　教会の歩みと予定

4月　教会定期総会（25日）
5月　九州教区総会（議決権行使書で開催）、創立記念日礼拝・ペンテコステ礼拝（23日）
7月　地区交換講壇（中止）、河野泰重さん洗礼式（4日）
8月　平和聖日（1日）
11月　逝去者記念礼拝、
12月　アドヴェント、クリスマス諸行事
1月　新年礼拝(会場：若松バプテスト教会)　　地区信徒研修会
2月　信教の自由を守る平和集会
3月　地区総会

2021年7月4日、河野泰重さん受洗式

2021年7月4日、受洗式後記念撮影

毎月の集会

- 聖書研究祈祷会（休会中）
- あも～るの会（第3日曜日礼拝後）
- 生と死を考える会（休会中）
- 若松キリスト教連合祈祷会（毎月）

YouTubeにアップした礼拝：ホームページより

編集後記

筒井隆夫

コロナ禍が、2年にわたり続いています。若松教会の活動も、縮小しながら、細々と続けています。その中で、神様は、新しい方を遣わして下さいました。河野泰重さんは、昨年の5月から、熱心に礼拝に参列され、今年の7月４日、洗礼を受けられました。山﨑知恵美さんは、昨年のクリスマスイブに、お父様と一緒に来られ、オルガン奏楽者として、礼拝に参列されています。小泉弘樹さんと美樹さんは、今年の2月より礼拝に参列され、弘樹さんは、現在、コロナワクチンのご奉仕をされています。

また、新しい試みとして、礼拝に参列できない方のために、昨年末より、礼拝を録画し、YouTubeにアップしています。少しでも、何かできることを模索し、チャレンジしている状況です。